傷寒論解説

辨太陽病脈証并治第五

基　礎　理　論　§　発　展

この講義では、中国漢方医学の古典である『傷寒論』に記載されている処方について詳しく解説していきます。傷寒論は後漢時代の名医・張仲景により編纂された医学書であり、今日まで漢方医学の基礎として重要な位置を占めています。

本講義では、辨太陽病脈証并治第五から始まる処方を古典に則って解説します。太陽病から始まる六経弁証の理論に基づいた処方の組み立て方を学び、各生薬の特性や配合意義を理解することで、臨床応用力を高めることを目指します。

『傷寒論』とは

中国医学の古典的名著

後漢時代の張仲景により編纂された医学書で、現存する最古の臨床医学専門書の一つです。

六経弁証の体系化

太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰の六経弁証を確立し、症状の進行に合わせた処方を提示しています。

処方の基礎を確立

現代でも使用される多くの基本処方が初めて記載され、その方意（処方の意図）と使用法が詳述されています。

傷寒論の臨床的意義

応用と発展

現代医療との融合と新たな解釈

処方の活用

症状に合わせた古方の実践的使用

弁証論治の理解

六経病態の把握と適切な処方選択

基本理論の習得

陰陽・表裏・虚実の理解

傷寒論の学習は、単なる古典の暗記ではなく、弁証論治という漢方医学の本質を理解することから始まります。基礎理論を土台として、六経病態を把握する力を養い、実際の臨床で活用できる処方の選択眼を磨くことが重要です。そして最終的には、現代医学の知見と融合させた新たな解釈と発展へとつながっていきます。

太陽病の概念

太陽病の定義

六経病の第一段階で、外邪が人体の最も表層部（衛分）に侵入した状態を指します。
主に風寒の邪気による病証で、「表証」とも呼ばれます。

主な症状

- 悪寒発熱（特に悪寒が顕著）
- 頭痛、項背部のこわばり
- 脈浮（表在性の脈）
- 無汗または微汗

太陽病の分類

- 太陽中風証：風邪が主
- 太陽傷寒証：寒邪が主
- 太陽蓄水証：水滞が主

太陽中風と太陽傷寒の比較

分類	太陽中風	太陽傷寒
邪気の性質	風邪が主	寒邪が主
発汗	自汗あり	無汗
寒熱	悪風が主	悪寒が主
脈象	浮緩	浮緊
代表処方	桂枝湯	麻黄湯

太陽中風と太陽傷寒は、ともに外邪の侵入による表証ですが、症状の現れ方に違いがあります。太陽中風は風邪が主体で営衛不和を特徴とし、自汗があって風を嫌う症状が顕著です。一方、太陽傷寒は寒邪が主体で表の閉鎖を特徴とし、無汗で寒さを強く嫌う傾向があります。これらの鑑別は適切な処方選択のために重要です。

桂枝湯の条文

原文

太陽中風，陽浮而陰弱，陽浮者，熱自發，陰弱者，汗自出，嗇嗇惡寒，淅淅惡風，翕翕發熱，鼻鳴乾嘔者，桂枝湯主之。

読み下し文

太陽の中風、陽浮にして陰弱、陽浮なる者は、熱自ら発し、陰弱なる者は、汗自ら出で、嗇嗇として悪寒し、淅淅として悪風し、翕翕として発熱し、鼻鳴り乾嘔する者は、桂枝湯これを主る。

現代語訳

太陽中風の病態では、陽気が浮いて陰気が弱い状態である。陽気が浮くと自然に熱が生じ、陰気が弱いと自然に汗が出る。寒気がしてぶるぶる震え、風に当たるとゾクゾクし、熱感でほてり、鼻づまりがあり空嘔吐がある場合には、桂枝湯を用いる。

桂枝湯の処方構成

3両

桂枝（けいし）

3両（約9g）

発汗解表、温通陽気の作用がある。
体表の衛気を調整し、
風寒の邪気を発散させる。

3両

芍薬（しゃくやく）

3両（約9g）

営血を調和し、筋肉の痙攣や痛みを緩和する。過度の発汗を抑制する。

2両

甘草（かんぞう）

2両（約6g）

脾胃を補い、諸薬を調和する。
緩急止痛の作用もある。

3両

生姜（しょうきょう）

3両（約9g）

発散風寒、温中止嘔の作用がある。
桂枝と協力して発汗解表する。

12枚

大棗（たいそう）

12枚（約4個）

補脾和胃、調和営衛の作用がある。
甘草と協力して中気を補う。

桂枝湯の方意

営衛調和

桂枝・生姜と芍薬の配合で、体表の衛気と体内の営血のバランスを整える

汗の調整

桂枝・生姜の発散作用と芍薬の収斂作用により、過不足ない適度な発汗を促す

風寒邪の発散

桂枝・生姜の辛温な性質で風寒の邪気を体表から発散させる

脾胃の保護

甘草・大棗により脾胃を補い、発汗による栄養消耗を防ぐ

桂枝湯の臨床応用

主な適応症

- 風邪の初期症状（発熱・悪寒・自汗）
- インフルエンザや普通感冒の初期
- アレルギー性鼻炎
- 自律神経失調症
- 筋肉痛や関節痛を伴う諸症状

注意すべき病態

- 太陽傷寒証（無汗・悪寒重い場合）
- 陽明病（高熱・便秘を伴う場合）
- 湿邪が重い場合
- 血虚が著しい場合

五苓散との比較

特徴	桂枝湯	五苓散
主な病機	営衛不和・風寒表証	水湿停滞・表裏兼病
発汗	自汗あり	無汗または微汗
小便	通常は正常	少尿・渋滞
その他特徴	悪風、筋肉痛	口渇、頭痛、めまい
主な生薬	桂枝・芍薬・甘草・生姜・大棗	茯苓・猪苓・沢瀉・白朮・桂枝

桂枝湯と五苓散はともに太陽病の代表処方ですが、桂枝湯が営衛不和による風寒表証を主治するのに対し、五苓散は水湿停滞による表裏兼病を主治します。症状の特徴や脈証の違いを見極めて、適切に使い分けることが重要です。症例によっては合方して使用することもあります。

桂枝加葛根湯の条文と処方構成

条文（原文）

太陽病，項背強几几，反汗出，惡風者，桂枝加葛根湯主之。

読み下し文

太陽病、項背強く几几として、反って汗出で、悪風する者は、桂枝加葛根湯これを主る。

処方構成

- 桂枝：3両（約9g）
- 芍薬：3両（約9g）
- 甘草（炙）：2両（約6g）
- 生姜：3両（約9g）
- 大棗：12枚（約4個）
- 葛根：4両（約12g）

葛根の薬性と作用

生薬の特徴

マメ科のクズの根を乾燥させたもので、辛甘微温の性質を持ち、発散風熱、解肌退熱、透疹、昇陽止瀉、生津止渇などの作用がある。

解肌退熱・解表作用

項背部の筋肉の緊張や痛みを緩和し、外邪を発散させる効果が強い。桂枝や麻黄と併用することで解表作用が増強される。

項背部への特異性

特に首筋や背中の強ばりや痛みに対して有効で、頸部から背部にかけての筋緊張を緩和する作用を持つ。

現代的応用

葛根湯や葛根加朮附湯などの処方に含まれ、頭痛や肩こり、二日酔いなどの症状にも応用される。イソフラボノイドやプエラリンなどの有効成分を含む。

桂枝加葛根湯の方意

総合的な表証治療

風邪と筋肉症状の同時改善

項背部の症状改善

葛根による筋緊張の緩和と血行促進

解表作用の強化

桂枝湯基本処方による営衛調和

桂枝加葛根湯は桂枝湯の基本処方に葛根を加えることで、桂枝湯の営衛調和・解表作用に加えて、葛根の持つ項背部の筋緊張緩和作用を強化しています。太陽病で項背部の強ばりが顕著でありながらも自汗があり風邪に対する過敏性がある場合に用いられます。葛根は特に項背部の筋肉に作用し、桂枝湯の風邪に対する発散作用を補強します。

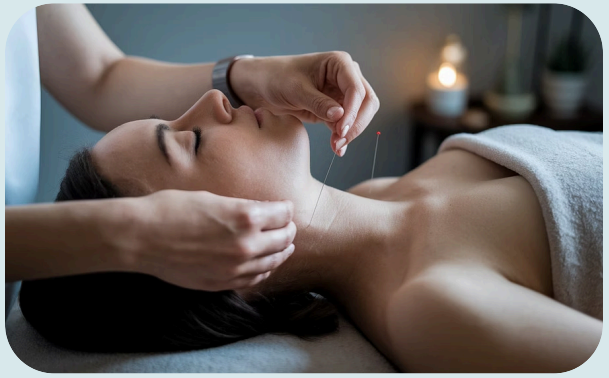
桂枝加葛根湯の臨床応用

頚部・肩こりの症状

首筋や肩のこわばり、痛みが顕著で、同時に風邪の初期症状（微熱、自汗、悪風など）を伴う場合に用いられます。特に寝違えやデスクワークによる筋緊張に有効です。

風邪に伴う筋肉痛

感冒の初期に背中や全身の筋肉痛を伴う場合に適応します。とくに自汗があり風に対する過敏性（悪風）がある場合に効果的です。



項背部からの頭痛

首筋のこわばりから後頭部にかけて痛みが放散する場合に用います。緊張性頭痛や筋緊張性頭痛にも応用できます。

桂枝加葛根湯の臨床応用

条文（原文）

太陽病，發汗，遂漏不止，其人惡風，小便難，四肢微急，難以屈伸者，桂枝加附子湯主之。

読み下し文

太陽病、発汗し、遂に漏れて止まざる者、その人悪風し、小便難く、四肢微急し、屈伸し難き者は、桂枝加附子湯これを主る。

処方構成

- 桂枝：3両（約9g）
- 芍薬：3両（約9g）
- 甘草（炙）：2両（約6g）
- 生姜：3両（約9g）
- 大棗：12枚（約4個）
- 附子（炮）：1枚（約3g）

附子の薬性と作用

生薬の特徴

キンポウゲ科のトリカブトの子根を加工処理したもので、辛甘大熱の性質を持ち、回陽救逆、補火助陽、散寒止痛などの作用を持つ。必ず炮製（加工処理）して使用する。

回陽救逆・補火助陽作用

体内の陽気を温め、衰えた陽気を回復させる効果が強い。特に腎陽を温め、全身の機能を活性化させる。

散寒止痛作用

体内に侵入した寒邪を温め散らし、寒による痛みを緩和する。特に四肢関節や腰背部の痛みに有効。

使用上の注意

猛毒性があるため必ず適切に炮製（加工処理）されたものを使用する。熱証や陰虚内熱には禁忌。専門家の指導のもとで使用する。

桂枝加附子湯の方意

汗漏の改善と営衛調和

陽気回復による発汗調節

陽気の回復

附子による温陽散寒作用

表邪の解消

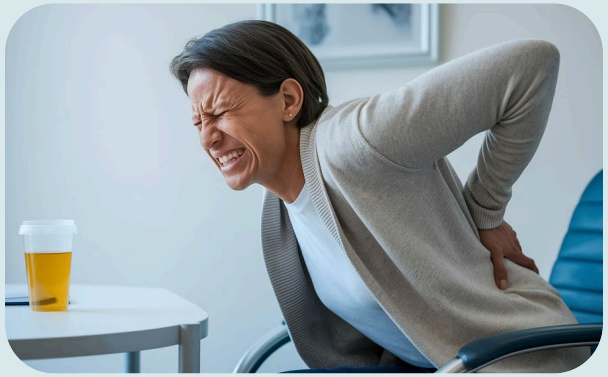
桂枝湯基本処方の効果

桂枝加附子湯は桂枝湯の基本処方に附子を加えることで、桂枝湯の営衛調和・解表作用に加えて、附子の持つ温陽散寒作用を強化しています。太陽病で発汗後に汗が止まらなくなった（汗漏）状態において、悪風、小便不利、四肢の緊張や屈伸困難といった症状がある場合に用います。これらの症状は過度の発汗により体内の陽気が消耗し、寒邪が内陥した結果と考えられます。

桂枝加附子湯の臨床応用

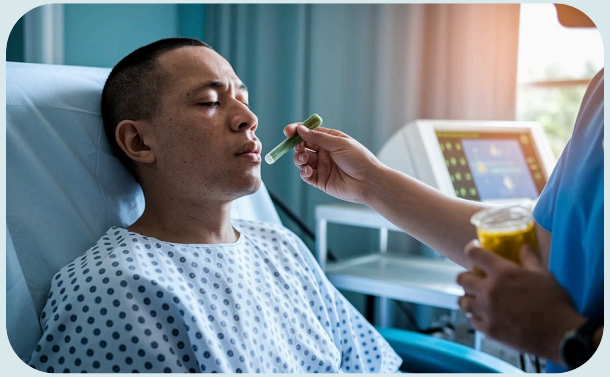
陽虚による自汗

陽気不足による止まらない自汗があり、風に対する過敏性（悪風）と四肢の冷えや関節のこわばりを伴う場合に用います。特に高齢者や体力の低下した方に多く見られます。



関節の屈伸困難

四肢関節の拘縮や屈伸困難があり、同時に小便不利（排尿困難や頻尿）を伴う場合に適応します。とくに気温の低下時に症状が悪化する場合に効果的です。



発汗後の体力低下

発汗療法や多量の汗をかいた後に、体力が低下し、悪風や関節のこわばりが現れた場合に用います。発汗による陽気の消耗を回復させる効果があります。

桂枝去芍薬湯の条文と処方構成

条文（原文）

太陽病，下之後，脈促，胸滿者，桂枝去芍藥湯主之。

読み下し文

太陽病、これを下した後、脈促し、胸満する者は、桂枝去芍薬湯これを主る。

処方構成

- 桂枝：3両（約9g）
- 甘草（炙）：2両（約6g）
- 生姜：3両（約9g）
- 大棗：12枚（約4個）

（桂枝湯から芍薬を除いた処方）

芍薬を去る意義

収斂作用の除去

芍薬の収斂作用を避ける

気の流れの改善

気機の鬱滞を解消する

胸満の改善

胸部の膨満感を軽減する

桂枝去芍薬湯で芍薬を除く重要な理由は、芍薬の持つ収斂作用（引き締める作用）が胸満の症状を悪化させる可能性があるためです。太陽病で下法（下剤）を使用した後に、脈が促（速く短い）になり、胸満（胸部の膨満感）が現れた場合、これは気機の鬱滞が生じている状態と考えられます。このとき芍薬の収斂作用はさらに気の流れを滞らせるため、これを去ることで桂枝の発散作用を活かし、胸部の鬱滞を解消します。

桂枝去芍薬湯の方意

誤治後の病態把握

下法（下剤）後の脈促・胸満を太陽病の誤治と判断

処方構成の調整

桂枝湯から芍薬を除き、収斂作用を避ける

発散作用の活用

桂枝の発散作用を前面に出し、胸部の気鬱を解消

脾胃機能の保護

甘草・大棗・生姜で脾胃の機能を保護し回復させる

桂枝去芍薬湯の臨床応用

下剤使用後の胸満

便秘に対して下剤を使用した後に胸部の膨満感や圧迫感が生じた場合に用います。特に脈が促（速く短い）となっている場合が適応となります。

気機鬱滞による胸部症状

胸部の不快感、圧迫感、膨満感などの症状があり、気の流れの停滞が原因と考えられる場合に効果的です。気持ちの落ち込みやため息が多いなどの症状を伴うことも。

消化器症状を伴う胸満

胸部症状と同時に、食欲不振、胃もたれ、腹部膨満感などの消化器症状を伴う場合にも応用できます。特に下剤の使用後に現れた場合に有効です。

桂枝去芍薬加附子湯の条文と処方構成

条文（原文）

太陽病，下之後，脈促，胸滿者，桂枝去芍藥湯主之。
若微惡寒者，桂枝去芍藥加附子湯主之。

読み下し文

太陽病、これを下した後、脈促し、胸満する者は、桂枝去芍薬湯これを主る。もし微かに悪寒する者は、桂枝去芍薬加附子湯これを主る。

処方構成

- 桂枝：3両（約9g）
- 甘草（炙）：2両（約6g）
- 生姜：3両（約9g）
- 大棗：12枚（約4個）
- 附子（炮）：1枚（約3g）

桂枝去芍薬加附子湯の方意

微悪寒の改善

附子の温陽作用による寒邪の除去

胸満の解消

芍薬を除くことによる気機鬱滞の改善

脾胃機能の回復

甘草・大棗による中焦の補益

桂枝去芍薬加附子湯は、桂枝去芍薬湯の状態に加えて微悪寒（軽度の悪寒）が見られる場合に用います。これは太陽病で下法を誤用した後に、気機の鬱滞による胸満だけでなく、陽気の損傷による悪寒も生じた状態です。芍薬を除くことで収斂作用を避け気機の流れを改善し、附子を加えることで陽気を回復させ寒邪を温めます。これにより、胸満と微悪寒の両方の症状を同時に改善することを目指します。

桂枝去芍薬加附子湯の臨床応用

微悪寒を伴う胸満

胸部の膨満感や圧迫感に加えて、軽度の悪寒（寒気）を伴う場合に適応します。特に下剤の使用後や風邪の治療後に現れるケースが多いです。

- 下剤使用後の気虚と陽虚
- 四肢の冷えを伴う胸部症状
- 食欲不振と微悪寒の併発

臨床上の注意点

附子は強力な温陽薬であるため、使用に際しては以下の点に注意する必要があります。

- 熱証や陰虚内熱の患者には使用しない
- 必ず炮製（加工処理）された附子を使用する
- 用量に注意し、使用中は患者の反応を注意深く観察する
- 妊婦や高血圧患者への使用は慎重に行う

桂枝二麻黄一湯の条文と処方構成

条文（原文）

服桂枝湯，大汗出，脈洪大者，與桂枝湯，如前法。若形如瘧，一日再發，汗出必解者，宜桂枝二麻黄一湯。

読み下し文

桂枝湯を服し、大いに汗出で、脈洪大なる者は、桂枝湯を与うること前法の如くす。もし形瘧の如く、一日に再発し、汗出でて必ず解す者は、桂枝二麻黄一湯に宜し。

処方構成

- 桂枝：1両17銖（約5.9g）
- 芍薬：1両6銖（約5.6g）
- 麻黄：16銖（約4.8g）
- 生姜：1両6銖（約5.6g）
- 杏仁：16個（約4.8g）
- 甘草（炙）：1両2銖（約4.5g）
- 大棗：5枚（約3.3g）

麻黄の薬性と作用

生薬の特徴

マオウ科の麻黄の茎を乾燥させたもので、辛温の性質を持ち、発汗解表、宣肺平喘、利水消腫などの作用がある。

発汗解表作用

強力な発汗作用により体表の邪気を発散させる。特に無汗の表証（太陽傷寒証）に対して効果的。

宣肺平喘作用

肺の気の流れを改善し、気管支を拡張して喘息や咳嗽を緩和する。

使用上の注意

興奮作用や発汗作用が強いため、自汗、高血圧、心疾患、不安、不眠などがある患者には慎重に使用する。

桂枝二麻黄一湯の方意

発作性発熱

瘧状（マラリア様）の発作性発熱

桂枝剤と麻黄剤の配合

2:1の比率で桂枝湯と麻黄湯を組み合わせる

適度な発汗

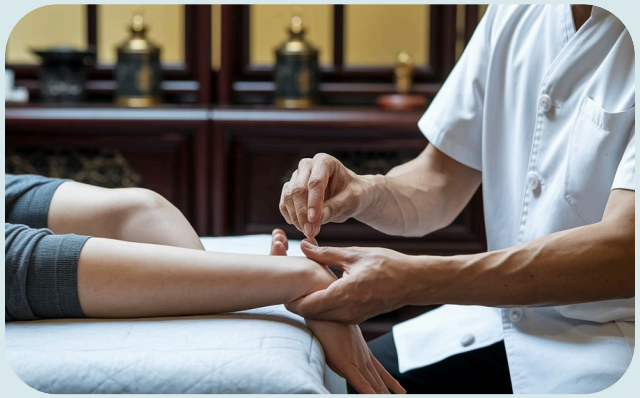
発汗により解熱を促進する

桂枝二麻黄一湯は、桂枝湯と麻黄湯を2:1の比率で組み合わせた処方です。桂枝湯を服用して大量の発汗があった後も、なお瘧（おこり）のような発熱と悪寒が一日に二度発作する場合に用いられます。桂枝湯の営衛調和作用だけでは不十分な場合に、麻黄を加えることで発汗を促進し、体表の邪気を効果的に排除します。しかし、麻黄の量を桂枝の半分に抑えることで、過度な発汗を防ぎ、体力の消耗を避けます。

桂枝二麻黄一湯の臨床応用

周期性の発熱悪寒

一日に2回程度、周期的に発熱と悪寒が繰り返し、発汗すると解熱するパターンを示す場合に用います。いわゆる瘧状（マラリア様）の症状に適応します。



寒熱往来

寒気と熱感が交互に現れる状態で、特に発汗によって症状が一時的に改善する場合に効果的です。半表半裏の証の一種としても考えられます。

桂枝湯で不十分な発汗

桂枝湯を服用しても発汗が不十分で症状の改善が見られない場合に応用します。麻黄の追加により発汗作用を強化しますが、桂枝湯の性質を保持します。

白虎加人参湯の条文と処方構成

条文（原文）

傷寒、脈浮滑、這熱有り。白虎加人参湯之を主る。

読み下し文

傷寒にして、脈が浮滑なるは、これ熱あるなり。白虎加人参湯これを主る。

処方構成

- 石膏：1斤（約375g）
- 知母：6両（約22.5g）
- 甘草（炙）：2両（約7.5g）
- 粳米：6合（約90g）
- 人参：3両（約11.25g）

石膏と知母の薬性

石膏（せっこう）

含水硫酸カルシウムの鉱物で、辛甘大寒の性質を持つ。主に肺胃の実熱を清熱し、気分消暑（暑熱による不快感を改善）する作用がある。特に高熱、口渇、汗出、気分煩熱などの症状に用いられる。

- 清熱瀉火：強力な清熱作用で体内の熱を冷ます
- 除煩止渇：煩熱感や口渇を改善する
- 清肺胃実熱：肺と胃の熱を鎮める

知母（ちも）

ユリ科ハナスゲの根茎で、苦寒の性質を持つ。清熱瀉火、滋陰降火、潤燥などの作用がある。特に陰虚内熱、骨蒸労熱、消渇などの症状に用いられる。

- 清熱瀉火：熱を冷まし、火を瀉す
- 滋陰降火：陰を補い、火を降ろす
- 潤燥止渇：乾燥を潤し、口渇を止める

白虎加人参湯の方意

津液の回復

人参による滋潤と気陰の補充

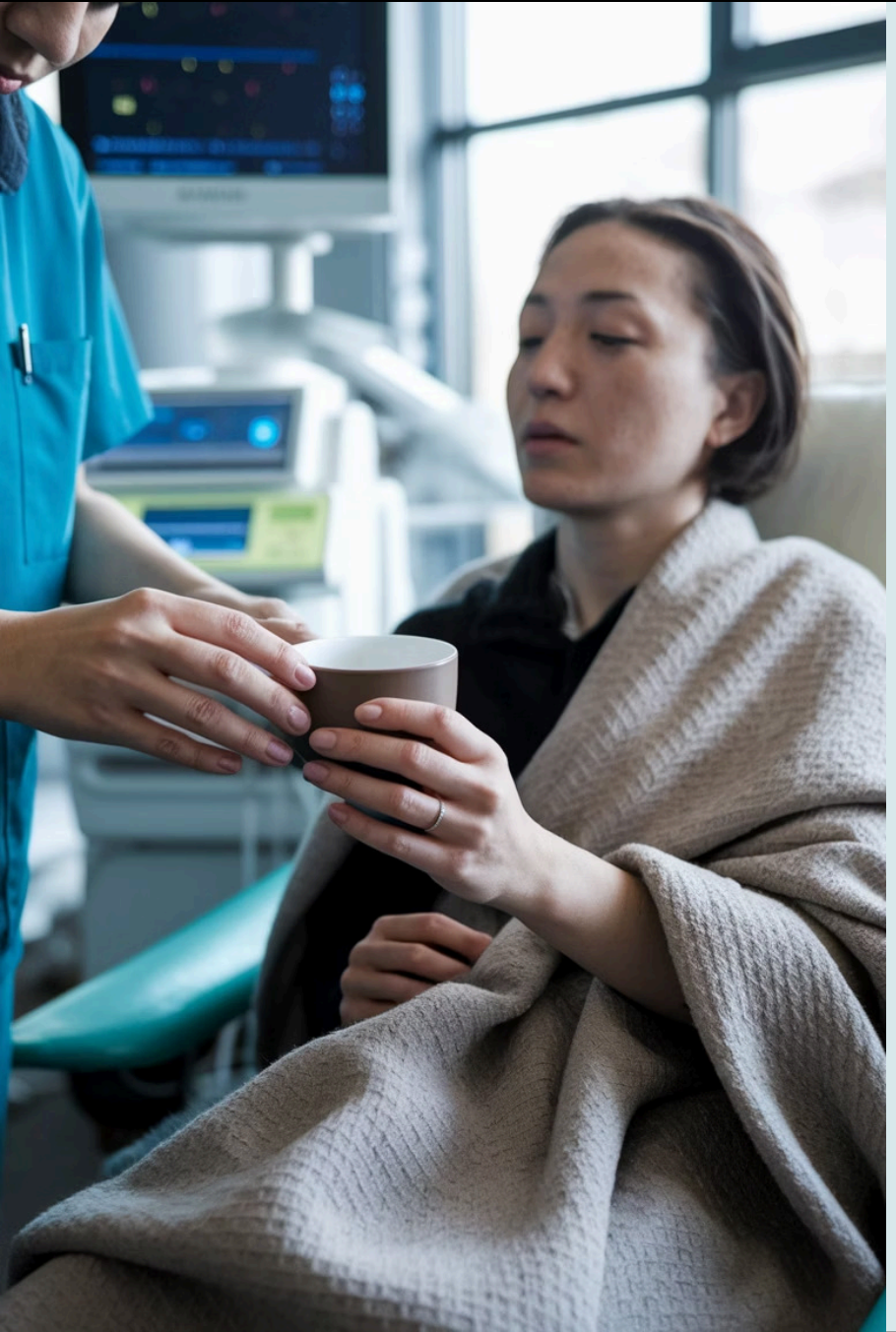
強力な清熱作用

石膏・知母による熱の除去

脾胃の保護

粳米・甘草による中焦の補益

白虎加人参湯は、強い熱証に対して用いられる代表的な清熱剤です。石膏と知母の組み合わせにより、体内の過剰な熱を効果的に冷まし、粳米と甘草で脾胃を保護します。ここに人参を加えることで、清熱による陰液の消耗を防ぎ、同時に気陰を補充します。浮滑脈（浮いていて滑らかな脈）は体内に熱があるサインとされ、この処方の良い適応となります。特に気津両傷（気と津液の両方が傷ついた状態）に有効です。



白虎加人参湯の臨床応用

高熱

強い発熱と煩熱感を伴う状態

口渇

強い渇きと冷たい飲み物を欲する症状

気虚

倦怠感やエネルギー低下を伴う場合

白虎加人参湯は主に以下のような病態に応用されます。急性熱性疾患で高熱、口渇、多汗があり、特に冷たい飲み物を欲する状態。糖尿病の口渇、多飲、多尿などの「消渇」症状。気虚を伴う熱証（疲労感や脱力感を伴う発熱状態）。皮膚の熱感や炎症を伴う湿疹、皮膚炎。熱中症で体内に熱がこもり、強い口渇やほてりを感じる場合。いずれも浮滑脈（浮いていて滑らかな脈）を特徴とします。

桂枝二越婢一湯の条文と処方構成

条文（原文）

太陽病，發熱惡寒，熱多寒少，脈微弱者，此無陽也，不可發汗，宜桂枝二越婢一湯。

読み下し文

太陽病、発熱悪寒し、熱多く寒少なく、脈微弱なる者は、これ陽無きなり。発汗すべからず、桂枝二越婢一湯を宜しくす。

処方構成

- 桂枝：2両（約7.5g）
- 芍薬：2両（約7.5g）
- 麻黄：1両（約3.75g）
- 石膏：3～5両（約11.25～18.75g）
- 生姜：1両2銖（約4.5g）
- 大棗：4枚（約6g）
- 甘草（炙）：1両（約3.75g）

越婢湯とは

越婢湯の概要

越婢湯は麻黄と石膏を主薬とする処方で、発汗解表と清熱の作用を兼ね備えています。特に表熱証（表に熱がある状態）に用いられます。

構成生薬

麻黄、石膏、生姜、大棗、甘草を含み、麻黄の発汗作用と石膏の清熱作用が中心となります。

主な適応症

発熱を伴う表証、熱性関節炎、浮腫を伴う熱証などに用いられます。特に表に熱があり、発汗が必要な場合に適しています。

桂枝二越婢一湯の方意

1 **複合的な表証治療**

桂枝湯と越婢湯の調和

熱証への対応

石膏による清熱作用

営衛調和

桂枝湯の基本作用

桂枝二越婢一湯は、桂枝湯と越婢湯を2:1の比率で組み合わせた処方です。太陽病で発熱と悪寒があり、特に発熱が強く悪寒が軽度で、脈が微弱な場合に用います。「無陽」とは体内の陽気が不足している状態を指し、このような状態では通常の発汗療法は禁忌となります。そこで、桂枝湯の発汗作用と越婢湯の清熱作用を併せ持つこの処方を用い、過度な発汗を避けつつ、体内の過剰な熱を除去します。

桂枝二越婢一湯の臨床応用

微弱脈を伴う発熱

脈が微弱であるにもかかわらず、発熱が強く、特に悪寒よりも熱感が強い場合に用います。一般的な解熱剤や発汗剤が使いにくい患者に適しています。

体力低下者の表証

高齢者や体力の低下した患者さんの風邪症状に適応します。特に発熱があるが体力がなく、強い発汗療法が適さない場合に効果的です。

表熱と陽虚の併存

体表に熱証があるが、根本的には陽気が不足している複雑な病態に対応します。一般的な清熱剤だけでは体力を消耗してしまう場合に有用です。

桂枝去桂加白朮茯苓湯の条文と処方構成

条文（原文）

桂枝湯を服し，或いは之を下し，仍お頭項強ばり痛み，翕翕として発熱し，汗無く，心下満ち，微痛し，小便不利の者は，桂枝去桂加茯苓白朮湯之を主る。

読み下し文

桂枝湯を服し、あるいはこれを下し、なお頭項強ばり痛み、翕翕として発熱し、汗なく、心下満ち、微痛し、小便不利なる者は、桂枝去桂加茯苓白朮湯これを主る。

処方構成

- 芍薬：3両（約9g）
- 甘草（炙）：2両（約6g）
- 生姜：3両（約9g）
- 大棗：12枚（約6g）
- 茯苓：3両（約9g）
- 白朮：3両（約9g）

茯苓と白朮の薬性

茯苓（ぶくりょう）

サルノコシカケ科のマツホドの菌核で、甘淡平の性質を持つ。利水滲湿、健脾寧心などの作用がある。

- 利水滲湿：余分な水分を排出する
- 健脾：脾の機能を高める
- 寧心安神：心を安定させる

水湿の停滞による小便不利、浮腫、めまい、動悸、不安などに用いられる。

白朮（びゃくじゅつ）

キク科のオケラの根茎で、苦甘温の性質を持つ。健脾益気、燥湿利水、止汗などの作用がある。

- 健脾益気：脾の機能を高め、気を補う
- 燥湿利水：湿を乾かし、水を排出する
- 止汗：過度の発汗を抑える

脾虚による食欲不振、倦怠感、下痢、浮腫、自汗などに用いられる。

桂枝を去り茯苓白朮を加える理由

誤治後の評価

桂枝湯や下剤による治療後の病態変化

桂枝の除去

発汗解表作用を避け、陽気の消耗を防ぐ

茯苓・白朮の追加

水湿停滞の除去と脾胃機能の回復

水分代謝の改善

小便不利を改善し体内の余剰水分を排出

桂枝去桂加白朮茯苓湯の方意

水湿の排出

茯苓・白朮の利水作用で余分な水分を排出

脾胃機能の回復

白朮・茯苓の健脾作用で消化機能を改善

営気の調和

芍薬・生姜・大棗・甘草で営気を調整

小便の通利

利水作用により排尿を促進

桂枝去桂加白朮茯苓湯の臨床応用

水滞による頭痛

頭項部の強ばりや痛みがあり、小便不利（尿量減少や頻尿）を伴う場合に用います。特に発汗療法や下剤の使用後に現れた場合に効果的です。

心下部の満痛

みぞおちのあたりが張って軽い痛みがあり、微熱や発汗不良を伴う場合に適応します。水湿の停滞が原因と考えられる消化器症状に有効です。

小便不利

尿の出が悪い、頻尿、尿量減少などの小便の異常があり、頭痛や心下満などを伴う場合に応用します。体内の水湿停滞を改善します。

甘草乾姜湯の条文と処方構成

条文（原文）

傷寒、脈浮、自汗出、小便数、心煩、微悪寒、脚攣急者、桂枝湯主之。若加温針、必驚、心乱、血気逆流、咽中乾、煩躁、吐逆者、甘草乾姜湯主之。

読み下し文

傷寒にして、脈浮、自然に汗出で、小便数（しばしば）く、心煩し、微悪寒し、脚攣急する者は、桂枝湯之を主る。もし温針を加えれば、必ず驚き、心乱れ、血気逆流し、咽中乾き、煩躁し、吐逆する者は、甘草乾姜湯之を主る。

処方構成

- 甘草：4両（約12g）
- 乾姜：2両（約6g）

乾姜の薬性と作用

生薬の特徴

ショウガ科の生姜を乾燥させたもので、辛熱の性質を持ち、温中散寒、回陽通脈、温肺化飲などの作用がある。生姜より温熱作用が強い。

温中散寒作用

中焦（脾胃）を温め、寒邪を散らす効果がある。胃腸の冷えによる腹痛、嘔吐、下痢などを改善する。

回陽通脈作用

陽気を回復させ、血脈の流れを改善する。虚脱状態や四肢の厥冷に対して効果的。

温肺化飲作用

肺を温め、水飲を化す作用がある。寒痰による咳嗽や喘息に用いられる。

甘草乾姜湯の方意

吐逆の改善

胃の機能回復による嘔吐の緩和

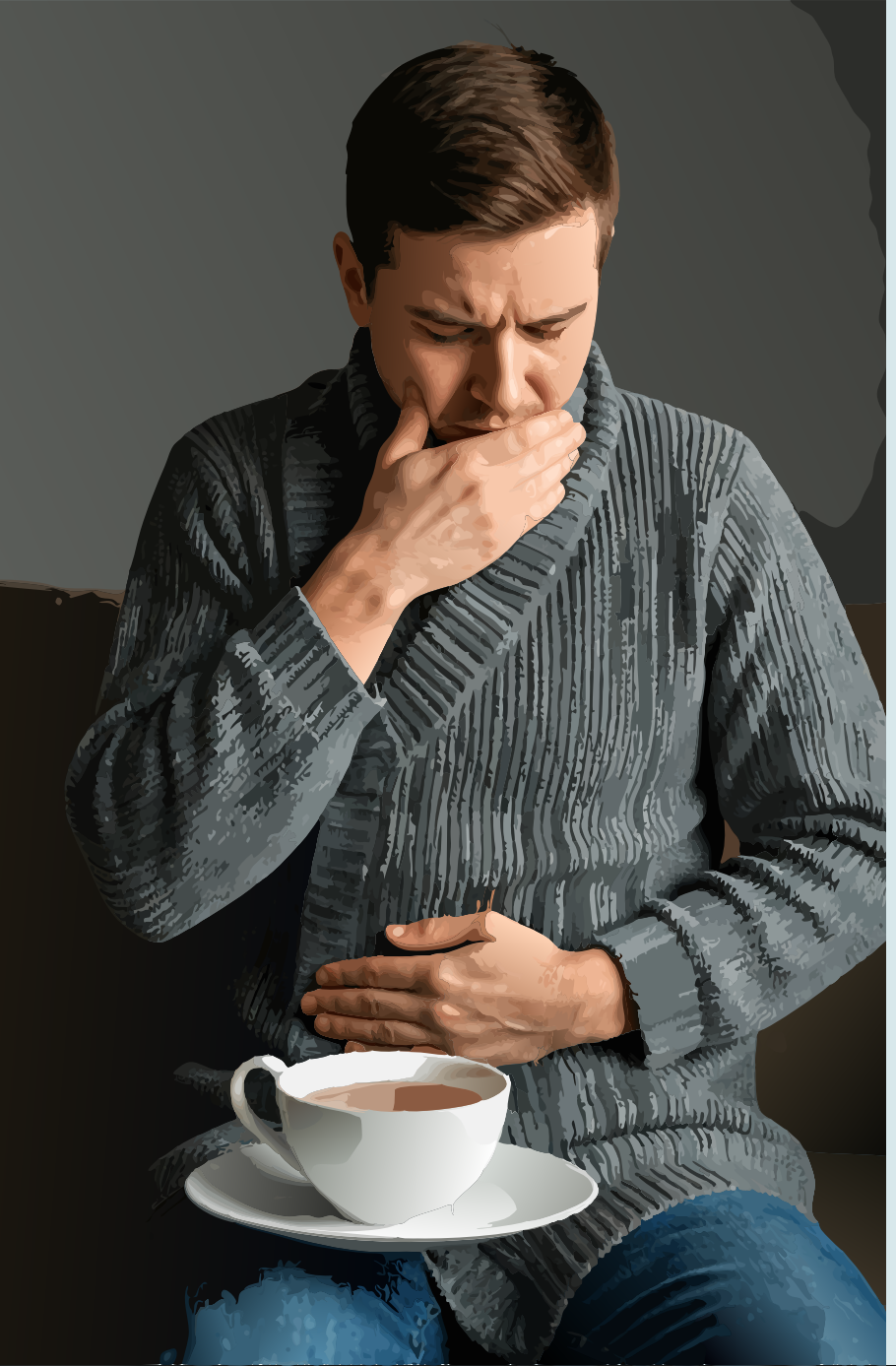
温中散寒

乾姜による中焦の温め

脾胃の調和

甘草による中焦の補益

甘草乾姜湯は、甘草と乾姜のシンプルな二味からなる処方で、脾胃の陽気を温め、寒冷による機能低下を改善することを目的としています。この処方は、桂枝湯証の患者に誤って温針（温灸や加温した鍼治療）を行った結果、驚きやすくなり、心が乱れ、血気が逆流し、喉の渇き、煩躁、嘔吐などの症状が現れた場合に用いられます。甘草が脾胃を補い、乾姜が温中作用を持ち、両者の組み合わせで脾胃の冷えによる症状を改善します。



甘草乾姜湯の臨床応用

胃寒による嘔吐

胃の冷えが原因で起こる嘔吐や吐き気に効果的です。特に冷たいものを摂取した後に症状が悪化する場合や、温かいものを欲する場合に適しています。

咽喉の乾燥感

喉の乾きや不快感があり、同時に消化器症状（吐き気や胃部不快感）を伴う場合に用います。特に寒冷による症状悪化が見られる場合に有効です。

煩躁・心乱

精神的な落ち着きのなさや不安感があり、同時に胃腸の冷えによる症状を伴う場合に応用します。特に胃の陽気不足による症状と考えられる場合に効果的です。

誤治後の陽気損傷

発汗療法や冷却療法の誤用により、体内の陽気が損傷され、嘔吐や不安感などが現れた場合に用います。特に脾胃の機能低下が見られる場合に適しています。

芍薬甘草湯の条文と処方構成

条文（傷寒論における言及）

芍薬甘草湯は傷寒論の太陽病篇の条文中に「脛攣急」（すねの筋肉が引きつる）症状への対応として言及されています。また痙攣や疼痛に関する多くの条文で言及されています。

処方構成

- 芍薬：4両（約12g）
- 甘草：4両（約12g）

両者を等量配合するシンプルな二味処方です。

芍薬の薬性と作用

生薬の特徴

ボタン科のシャクヤク（芍薬）の根を乾燥させたもので、苦酸微寒の性質を持ち、養血柔肝、平抑肝陽、収斂固渋などの作用がある。

養血柔肝作用

血を養い、肝を柔らかくする効果がある。肝血不足による頭痛、めまい、視力低下などを改善する。

緩急止痛作用

筋肉の痙攣や疼痛を緩和する。腹痛、筋肉痛、関節痛などに効果的。

収斂固渋作用

収斂作用により過度の発汗や下痢を抑制する。自汗、盗汗、久泄などに用いられる。

芍薬甘草湯の条文と処方構成

筋肉の痙攣

疼痛を伴う筋肉の異常収縮

芍薬と甘草の協働

酸甘化陰による筋肉緩和

痙攣と疼痛の緩解

筋肉の弛緩と痛みの軽減

芍薬甘草湯は、芍薬と甘草を等量配合した処方で、主に筋肉の痙攣や疼痛を緩和することを目的としています。芍薬は酸味があり収斂作用を持ち、筋肉の異常な収縮を抑制します。甘草は甘味があり緩和作用を持ち、痙攣や疼痛を鎮めます。両者の組み合わせ（酸甘化陰）により、筋肉の痙攣や疼痛を効果的に改善します。現代では、電解質のバランスが崩れた際の筋肉の痙攣にも有効とされています。

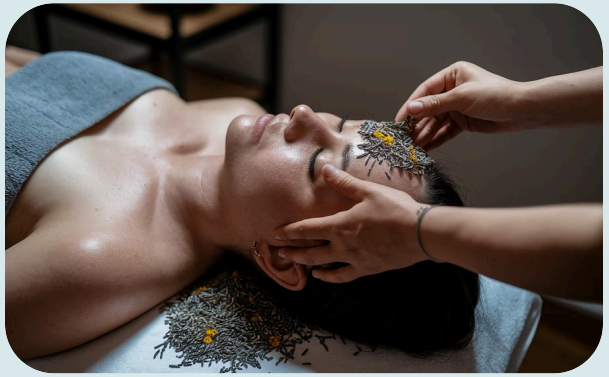
芍薬甘草湯の臨床応用

こむら返り

ふくらはぎなどの急な筋肉の痙攣（こむら返り）に対して即効性があります。特に夜間や運動後に起こる筋肉の痙攣に効果的です。

腹部の痙攣性疼痛

腸管の痙攣による腹痛や生理痛など、内臓平滑筋の痙攣性疼痛に適応します。特に冷えや精神的ストレスにより悪化する症状に有効です。



筋緊張性頭痛

頭部や首の筋肉の緊張によって起こる頭痛に応用できます。特に後頭部や側頭部の頭痛、肩こりを伴う頭痛に効果的です。

腸胃承気湯の条文と処方構成

条文（陽明病篇より）

傷寒論の陽明病篇には、腸胃に熱が鬱滞し、大便秘結、腹部膨満感や腹痛、高熱などの症状がある場合に、承気湯類を用いるという記載があります。腸胃承気湯はその一種で、大承気湯より比較的軽度の陽明腑実証に用います。

処方構成

- 大黄：4両（約12g）
- 厚朴：2両（約6g）
- 枳実：2両（約6g）
- 芒硝：3合（約9g）

大黄と芒硝の薬性

大黄（だいおう）

タデ科のダイオウの根茎で、苦寒の性質を持つ。瀉下攻積、清熱涼血、解毒、活血祛瘀などの作用がある。

- 瀉下攻積：強力な瀉下作用で腸内の停滞物を排出する
- 清熱涼血：熱を冷まし、血を冷やす
- 解毒：毒を解消する
- 活血祛瘀：血の流れを良くし、瘀血を取り除く

便秘、腹部膨満、熱性疾患、出血、炎症などに用いられる。

芒硝（ぼうしょう）

硫酸ナトリウムの結晶で、咸寒の性質を持つ。潟下、軟堅、清熱などの作用がある。

- 潟下：腸内の停滞物を排出する
- 軟堅：固い便を柔らかくする
- 清熱：熱を冷ます

便秘、腸閉塞、熱証などに用いられる。大黄との併用で相乗効果がある。

腸胃承気湯の方意

腸胃の熱実を瀉下

大黄と芒硝による強力な瀉下作用

気機の鬱滞を解消

厚朴と枳実による気滞の改善

腸胃の熱を冷ます

大黄と芒硝の寒涼な性質による清熱

便秘の改善

協調的な瀉下作用で大便を通じさせる

腸胃承気湯の臨床応用

1. **便秘**
   強い熱証を伴う便秘期間
2. **高熱**
   腸内熱鬱による発熱
3. **腹部膨満感**
   張りと痛みを伴う程度

腸胃承気湯は主に以下のような病態に応用されます。便秘と腹部膨満：数日間の便秘で腹部が張り、場合によっては痛みを伴う状態。高熱：腸内に熱が鬱滞することで生じる持続的な発熱。いわゆる「実熱」による症状。腹部の圧痛：特に下腹部を押すと痛みを感じる場合。口渇、口臭：熱証による口の渇きや不快な息。舌質紅、苔黄、脈実数：舌が赤く、舌苔が黄色で、脈が実で速い状態。これらは陽明腑実証の典型的な症状です。

四逆湯の条文と処方構成

条文（原文）

少陰病、四肢厥逆、悪寒、身痛、下利清穀者、四逆湯之を主る。

読み下し文

少陰病にして、四肢厥逆し、悪寒し、身痛し、下利清穀する者は、四逆湯これを主る。

処方構成

- 甘草：3両（約9g）
- 乾姜：2両（約6g）
- 附子：1枚（約6g）

少陰病の概念

少陰病の定義

六経病の五番目に位置し、主に腎の機能障害を特徴とする病態です。腎陽の衰退による寒証と、腎陰の不足による熱証の二つの主要な証に分かれます。

少陰寒証の特徴

四肢の厥冷（極度の冷え）、悪寒、身体の痛み、下痢（特に未消化の食物がそのまま出る清穀下痢）、脈の微細などが特徴です。四逆湯はこの少陰寒証に対応します。

少陰熱証の特徴

咽喉の乾燥や痛み、口内炎、舌の紅絳、不眠などが特徴です。黄連阿膠湯などの処方が用いられます。

四逆湯の方意

全身の陽気回復

生命力の復活

腎陽の温補

附子による深部の陽気回復

中焦の温め

乾姜と甘草による脾胃の温補

四逆湯は、体内の陽気が極度に衰退し、寒邪が内に侵入した状態、すなわち少陰病の重篤な寒証に対処するための方剤です。名前の「四逆」は四肢の厥逆（血流が悪く冷たくなった状態）を指し、この処方の主な適応症状を表しています。甘草は中焦を補い、乾姜は脾胃を温め、附子は腎陽を補い全身の陽気を回復させます。これにより、四肢の厥冷、悪寒、全身の痛み、下痢などの症状を改善します。

四逆湯の臨床応用

四肢厥逆（手足の冷え）

手足が極端に冷たく、場合によっては青白く変色している状態に用います。特に中心部（胸腹部）は温かいが四肢末端が冷たい場合に効果的です。

清穀下痢

未消化の食物がそのまま排出される下痢で、特に冷えを伴う場合に適応します。寒による消化機能の低下が原因の下痢症状に有効です。

陽気衰退の虚脱状態

重度の衰弱、冷え、脈微細など、体内の陽気が極度に衰えた危険な状態に応用します。いわゆる「回陽救逆」（衰えた陽気を回復させる）の代表処方です。

四逆湯と真武湯の比較

項目	四逆湯	真武湯
基本病機	少陰病の陽虚寒盛	少陰病の陽虚水泛
構成生薬	甘草・乾姜・附子	茯苓・白朮・生姜・白芍・附子
主な症状	四肢厥逆・悪寒・清穀下痢	悪寒・下痢・小便不利・四肢疼痛
特徴	純粋な温陽回陽	温陽と同時に利水
現代的応用	ショック状態・重度の冷え	浮腫・動悸・めまいを伴う冷え

四逆湯と真武湯はともに少陰病の代表処方ですが、四逆湯が純粋に陽気の回復を目的とするのに対し、真武湯は陽虚による水の氾濫（水泛）を治療します。四逆湯の症状がより重篤で緊急性があり、真武湯は水滞による症状が主体です。附子を含む点は共通していますが、真武湯には利水薬である茯苓と白朮が含まれているのが特徴的です。

傷寒論処方の現代的意義

古典の理解

傷寒論の基本概念と弁証論治の習得

現代医学との統合

現代病理生理学的見地からの再解釈

臨床応用の拡大

現代疾患への応用範囲の探求

エビデンスの構築

臨床研究による効果の検証と機序解明

傷寒論の処方は古代中国で編纂されたにもかかわらず、現代医療においても重要な意義を持っています。これらの方剤は長い歴史を通じて臨床効果が検証され、多くの疾患に対する有効性が証明されてきました。現代では、これらの古典処方の薬理作用や作用機序が科学的に研究され、新たな適応症も見出されています。伝統的な弁証論治の考え方を理解しつつ、現代医学の知見と融合させることで、より効果的で安全な治療法の開発が進められています。